

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## トロブリアンド諸島における民族資料の収集

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 繁樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00002259">https://doi.org/10.15021/00002259</a>

## トロブリアンド諸島における民族資料の収集

小林 繁 樹

(東京造形大学造形学部)

### 1. はじめに

本稿では、ジョージ・ブラウンのコレクションのなかでも、とくにトロブリアンド諸島とニューギニアの民族資料を取り上げて、その概要を紹介しつつ、博物館資料論の視点でその特徴に触れてみたい。

### 2. トロブリアンド諸島とニューギニアの民族資料

ジョージ・ブラウンのコレクションのうちニューギニア島南東地域の、収集民族資料の大きな地域的なまとまりはトロブリアンド諸島とニューギニアである。ここでは、これらの民族資料の概要を紹介する。

#### (1) トロブリアンド諸島の民族資料

ニューギニア島南東地域に位置するトロブリアンド諸島は、いうまでもなくB.マリノフスキーの調査で有名な地域である。1793年、フランス人のダントルカスターがヨーロッパ人として初めてこの地域を航海し、1840年代にはアメリカの捕鯨船が訪れるようになる。ジョージ・ブラウンは1890年7月21日に主島キリウィナに初めて立ち寄り、そこで4の写真を撮影し、言葉がニューブリテン島の言葉とよく似ていることに着目している(Brown 1978 [1908]: 483)。1890年代にはドイツ人が定期的にヤムイモの購入を始め、木彫や装身具などが収集され、博物館に所蔵されるようになる。さらにマリノフスキーは1910年代(1914-15年, 1915-16年, 1917-18年)に長期の社会人類学的調査を実施している(Malinowski 1922: 16)。住民はヤムイモのほかに、タロイモなどを栽培し、漁業も行なう。木彫やかごづくりなどに優れており、諸島内外での物品の交換活動も行なう。なかでも「クラ」とよばれる贈物交換活動が有名である。

国立民族学博物館収蔵のジョージ・ブラウン・コレクションのうちで、トロブリア

ンド諸島のものは283点を数える。そのおもな民族資料は、食物を入れる鉢、嗜好であるペーテル・チューイング用の石灰を入れるヒョウタンとへら、棍棒、ロープ、動物像やカヌーの形の彫刻品、首飾りなどである。

同館の標本管理情報からのコンピュータ処理にもとづくデータによると、トロブリアンド諸島の民族資料群は282点であり、筆者のまとめによるその内訳は、鉢68点、石灰用ヒョウタン46点、棍棒24点、彫刻品24点、ロープ23点、首飾り14点、石灰用へら14点、楯8点、カヌーの船首飾り7点、太鼓6点、臼6点、靴5点、杵5点、漁網4点、植物繊維3点、織物の標本3点、櫂3点、腰みの、ボート模型、家屋模型、槍、網作り道具が各2点ずつ、カヌー用装飾、玩具、耳飾り、彫刻用具、釣り糸つき釣り鉤、投石器、容器、棍棒の頭部、不明品が各1点ずつ、である。

この民族資料のなかで目を引くのは、剣か櫂の形をした木製の棍棒である。長さ150センチメートルにも達する棍棒は、重く、かつ美しい。一部に幾何学模様の刻印が施され、石灰の白色で彩色されている。また柄に近い部分には植物繊維が木部のすき間に差し込まれ、フリルが付いているような不思議な柔らかさを出している。この棍棒はかなり珍しい民族資料なのではないだろうか。筆者は実物を初めて目にし、おもな図録や書籍にも見当たらない<sup>1)</sup>。また、豊かな文様に彩色が鮮やかな楯や、特徴的な曲線を描くカヌーの船首飾りなどもある。ペーテル・チューイングに使う石灰容器としての模様入りのヒョウタンや、人物像などが精緻に彫刻されたへらなどもある。これらは皆、質的にもすぐれており、また保存状態もよい。

ジョージ・ブラウンは1890年代から1905年まで、ニューギニア島南東地域に滞在し収集をしている。それから20年もたたない1910年代にトロブリアンド諸島を調査したマリノフスキーは、その著作『西太平洋の遠洋航海者』で、いくつかの民族資料について触れている。その記述にある、例えば、呪術具であるアカエイのとげ、短く彩色された腰みの、ダンベルのような形をしている舞踏用の楯、農耕具、かごや櫛、貴重品としての大きな石斧やクジラの骨製の石灰用のさじ、航海用のカヌー、料理用の大きな土器、丸く湾曲したブタの牙 (Malinowski 1922 : 75, 53, 57, 60, 67, 99, 357-358, 124, 170-171, 357) などは、ジョージ・ブラウンの収集品目にはないようである。クラに使用される赤色のウミギクガイ製の首飾りと白色のイモガイ製の腕輪 (Malinowski 1922 : 81, 86) については、見事ではあるが首飾りが1点収集されているだけである。また、一種の通貨として機能するバナナの葉の乾燥束も収集されて

いない。

## (2) ニューギニアの民族資料

ジョージ・ブラウンがその収集地として「ニューギニア」とまとめる地域は、ニューギニア島南東部を中心にして、別項目で分けたトロブリアンド諸島を除いた地域のものである。それはおおよそ当時の英国領ニューギニアの本島部分の沿岸部地域と近隣の島嶼部にあたる。西はパプア湾から首都であるポート・モレスビーを経て、南東端のサマライ、そしてマダンのあるアストロラベ湾あたりまでの、おもに本島の南沿岸地域、そしてダントラカスター諸島、ルイジアーダ諸島、ウッドラーク島などである。この地域の住民は、ヤムイモやタロイモなどを焼畑で耕作する農耕民で、沿海部の人びとは漁業も行なう。いくつかの地域社会ではクラ贈物交換活動に参加している。

国立民族学博物館収蔵のジョージ・ブラウン・コレクションのうちで、ニューギニアのものは612点を数える。そのおもな民族資料は、櫛、腕輪、かご、腰みの、帯、首飾り、笛、杖、手斧の刃、装飾品、手斧の柄、カヌーの船首飾り、鉢などである。

同館の標本管理情報からのコンピュータ処理にもとづくデータによると、ニューギニアの資料群は604点であり、筆者のまとめによるその内訳は、櫛107点、腕輪100点、かご66点、腰みの29点、帯29点、首飾り27点、笛25点、杖20点、手斧の刃16点、装飾品13点、手斧の柄12点、カヌーの船首飾り11点、鉢10点、手斧10点、斧の柄10点、匙10点、容器9点、こま7点、鼻飾り7点、斧の刃7点、棍棒7点、サゴ攪拌具5点、楯5点、胸飾り4点、石灰用ヒョウタン4点、太鼓4点、鞆4点、ナイフ4点、袋3点、棍棒の頭部3点、弓3点、石灰用へら3点、枕3点、お守り、凧、叩き具、櫂、ロープが各2点ずつ、像、カヌー用装飾、やすり、漁網、耳飾り、樹皮布、錐、槍、竹細工、竹筒、彫刻用具、銅鑼、髪飾り、ヒョウタン、網作り用具と網、かつら、不明品が各1点ずつ、である。

この民族資料のなかで目を引く資料は、櫛、腕輪や首飾りなどの装身具類と石製の斧や手斧の類である。とくに印象的なのは、クラに使用されるウミギクガイ製首飾りである。今日見る首飾りに較べて付属の装飾部分が、例えば真珠母貝が小ぶりであったり、ガラス・ビーズの使用量が少なく、全体に小さく地味である。なによりも、装身具類が多いことも特徴的ある。これらは皆、質的にもしっかりしてすぐれており、保存状態も良好である。

### 3. ジョージ・ブラウンによる資料収集の方法

#### (1) 収集方法の概要

ジョージ・ブラウンは、実質的には1860年から1905年までの45年間、オセアニア各地での布教の仕事に従事しながら民族資料を収集し（石森1988：44-56,58）、死亡時に手元には3,166点の民族資料を所有していたとされる。生前にも、オーストラリア博物館を含めた組織や個人へ譲渡もしくは売却した民族資料を収集しているし、900点を超える写真も撮影している（Davis 1985：4；Rubel and Rosman 1996：66；Specht 1987：1-2）。けれども、その生涯に収集した民族資料の総数ははっきりしていない。そして国立民族学博物館には、彼の死後残された民族資料のほぼすべてである3,027点が収蔵されている<sup>2)</sup>。

これはかなりの数量なので、ジョージ・ブラウンはそうとう熱心に収集に当たったと言えるだろう。ルーベルとロスマンは、ブラウンの教団の後継者であったダックス師が聞いた話しを引用して、悪評が生まれるほどに彼や教団が民族資料の収集に熱心だったことを指摘している（Rubel and Rosman 1996：64,66）。筆者の個人的経験に照らしてみても<sup>3)</sup>、彼の旺盛な収集ぶりは納得できる。

しかし、ジョージ・ブラウンの具体的な収集状況は、あまりはっきりしていない。

ジョージ・ブラウンは、1891年からダントラカストー諸島のドブ島を中心にして布教活動を指導する。彼はこの前後の、1890年から1905年までに5回、この地域を旅行し滞在している。日時がはっきりしない箇所もあるが彼の自伝によると、1回目は1890年6月9日から8月14日まで、2回目は1891年6月13日から8月1日まで、3回目は1897年5月22日から9月20日まで、4回目は1901年7月7日から、おそらく7月29日まで、5回目は1905年10月の1か月間ほどである。この間、トロブリアンド諸島へは、船での移動も含めて1890年7月の、おそらく21日から22日までと、1897年の7月20日から27日までの、合計10日間ほど旅行、滞在している。またドブ島へは、1890年8月4日から5日、1891年6月の、おそらく16日から7月14日、1897年6月9日から7月19日、1897年9月2日から3日、1901年7月の、おそらく13日から18日、1905年は10月17日までの、はっきりはしないが1週間ほどの、合計2か月間ほど旅行、滞在している。ニューブリテン島での60日間ほどの滞在を除けば、トロブリアンド諸島を含めて、彼のいうところのニューギニアには、延べ230日間ほ

ど、約8か月間の滞在となるだろう (Brown 1978 [1908] : 466-512)。

これらの期間で、トロブリアンド諸島の民族資料の283点とニューギニアの民族資料の612点の、おそらく大部分を収集したのであろう。

彼自身による直接的な収集のほかに、教団などに依頼しておいて、あとからまとめて収集することもあったかも知れない。教団が教団活動を維持・発展させるために民族資料を収集するなかで (Eves 1998 : 49 ; 石森1999 : 24-25)、ブラウンは個人としての収集品をどのように区別していたのだろうか。少なくとも、死後残された民族資料は、彼の家族やブラウン家の管財人により売却されているので (Rubel and Rosman 1996 : 66 ; Specht 1987 : 1)、それらは教団とは関係のない私物であった、と考えられる。そして、ブラウンがどのように現地の住民から民族資料を収集したのかも、あまりはっきりはしていない。少なくとも自伝には記述が極めて少ない。自伝でのトロブリアンド諸島やニューギニアの項には、民族資料の収集活動についての直接的な記述はない。しかし、ビスマーク諸島の項では、交易目的で来たのではないことを分かってもらいたいために、彼がほしくない物であっても現地の住民が持ってくるものは何でも購入したとか、人骨のついた槍をたくさん購入したとか、石灰岩製の像をいくつか購入したと記載されているし (Brown 1978 [1908] : 118,125, 127-128)、ビーズの束でも交換している (Rubel and Rosman 1996 : 63)。また赤い布 (Brown 1978 [1908] : 487) や鉄の輪 (Rubel and Rosman 1996 : 63) も価値があったようなので、ブラウンはトロブリアンド諸島やニューギニアでも民族資料を貨幣で購入したり<sup>4)</sup>、こうした物品で交換したのであろう。ブラウン自身、珍しいことと驚いてはいるが、ニューブリテン島では多量の槍や石斧、貝やかごなどを贈られている (Brown 1978 [1908] : 509-510) ので、彼の収集品のなかにはこうした贈物も含まれていたかも知れない。それにしても、イーヴスが主張するように、伝道教団にとって現地からの民族資料はその布教活動の成果としての意味をもつ (Eves 1998 : 49) のは、程度問題は別として当然であるから、ジョージ・ブラウンは彼個人としての収集活動と教団の収集活動とをどのように考えて峻別していたのであろうか。

収集された民族資料自体に関する情報も少ない。個々の民族資料の名称と収集地名の他に、ごくわずかの簡単で補足的な記述だけである<sup>5)</sup>。

ジョージ・ブラウンの50年間にもおよぶ収集期間の間、収集された民族資料はどこに、どのように保管されていたのか、また彼の1917年のシドニーでの死後、1921年

にイギリスの故郷にあるボウズ博物館に売却される間の収蔵保存状況もはっきりしない。1975年から1985年ほどの10年間に、その当時の収蔵先であったハンコック博物館で大英博物館からの専門家により保存処理が施され、1981年から1983年までは2人の人類学者Elizabeth StevensonとAntonia Patersonも、登録作業とともにその仕事に加わっている(Davis 1985:4)。しかしそれにしても国立民族学博物館に収蔵されている現在の民族資料は、100年から140年も前に収集された民族資料とは思えないほど良好な状態であるので、イギリスに渡るまでも、かなり配慮の行き届いた状態で管理、保管されていたことは明らかである。

## (2) クラにかかわる民族資料

トロブリアン諸島とニューギニアからの収集民族資料についてみると、ジョージ・ブラウンはトロブリアン諸島からの民族資料を283点収集し、諸島には2回、10日間ほど滞在している。しかし、すでに述べたように、後にマリノフスキーが記述したクラで使用される交換品や石斧などは、首飾りの1点を除いては、収集されていない。

一方、ニューギニアからの民族資料612点のなかには、クラ贈物交換活動に関わると考えられる腕輪や首飾り、石斧などが数多く収集されている。筆者が数えたところ、トロブリアン諸島からはウミギクガイ製首飾りが1点だけだったのに、ニューギニアからは、ウミギクガイ製首飾りが4点、イモガイ製腕輪が19点、緑石の、大きく精緻なつくりの石斧が6点、石斧の贈呈用の柄が7点あり、さらにトロブリアン諸島に特徴的なカヌーの船首飾りが6点もある。

また、ドブ島は布教の拠点となり、ジョージ・ブラウン自身がニューギニア訪問のたびごとに立ち寄り、延べ2か月間も滞在したと考えられる島である。それなのに収集地がドブ島とはっきりしている民族資料は、わずか28点しかない。

しかもクラの主要な活動地であるドブ島をニューギニアでの拠点にし、1890年以降という時点ではすでに彼自身が人類学的関心を十分に持ち、そのうえニューブリテン島での秘密結社であるドックドックの記述すらしていながら(Brown 1972 [1910]: v-vi, 60-72; 石森 1988: 56-57)、彼の収集品データのどこにも「クラ」という記載は見られない。

(3) シアシ諸島、マンドッグ島民族資料との比較

コレクションの特徴は、他のコレクションと比較することによりいっそうはっきりしてくる。そこで筆者が収集したシアシ諸島からのコレクションと比較してみたい。

シアシ諸島は、ニューギニア本島とニューブリテン島との間、ウムボイ島の南に位置する。ソロモン海をはさんでトロブリアンド諸島の北西方にあたる。住民はムトゥ語を用い、人口は2300人(1990年)あまりで、漁業と焼畑根栽農耕を行なう。そしてまた、ヒューオン半島とニューブリテン島西部地域を範囲とするラヴェーンとよぶ贈物交換活動を行なっている。しかしウムボイ島近くのマンドッグ島を含む4島は、本来、農地を持たず漁業と贈物交換活動を生業としており、現在でもそれらの活動は活発である。実力者に導かれる平等的な父系社会を構成し、ラヴェーンでは重要な中継者となる(小林 1992, 1993)。筆者はこのマンドッグ島を中心にして、1978年8月30日から10月3日までの35日間で、768点の、生活用具をほぼセットとして収集した(小林 1979)。

ジョージ・ブラウンが収集したトロブリアンド諸島とニューギニア、それらを筆者がニューギニア全体としてまとめたもの、それに筆者自身が収集したマンドッグ島からの民族資料の内容を、おおまかな機能別項目にもとづいて分類し、その組成を示したのが図1である<sup>6)</sup>。

この図からは、トロブリアンド諸島からの民族資料では、衣服や装身具を含む衣関係と生業関係の割合が少なく、一方、食器や、武器、彫刻品や嗜好品を含む社会・人生関係と、芸術・娯楽関係の割合が多いことを、またニューギニア

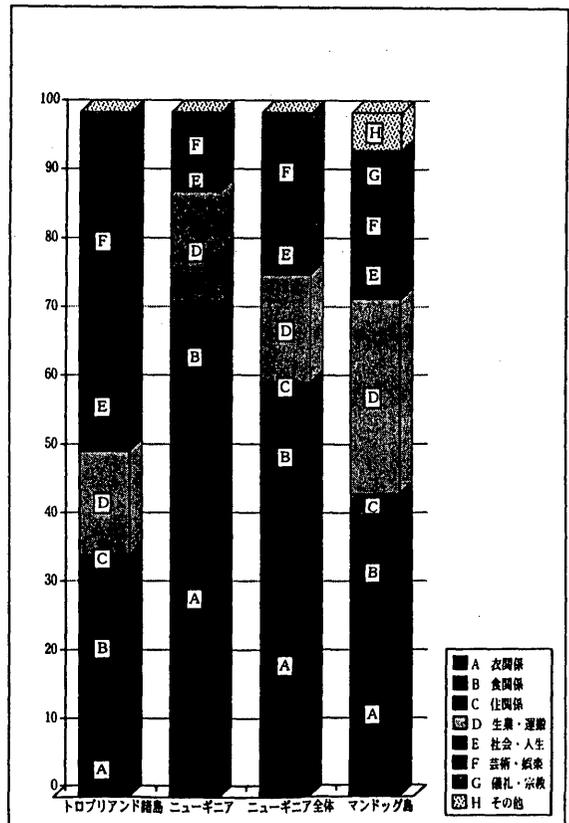


図1 民族資料群の組成図

アンド諸島とは逆に、衣関係の割合がとりわけ多く、社会・人生関係と芸術・娯楽関係の割合が少ないことが読み取れる。万遍なく生活用具のセットになるように意識して収集したマンドッグ島からの民族資料と比較すると、トロブリアンド諸島やニューギニアからの民族資料には、収集内容に偏りがあるように見られる。しかしトロブリアンド諸島とニューギニアを合わせたニューギニア全体の割合をみると、マンドッグ島の民族資料と似通ってくる。

これは、ジョージ・ブラウンが収集したトロブリアンド諸島とニューギニアからの民族資料を合わせてみると、特定の資料にあまり偏ることがなく、割合、生活用具の全般が収集されていることを意味している。

装身具や武器、彫刻物などは収集する者の目にとまりやすいので、一般的にそれらの割合は多くなるものであろう。彼がトロブリアンド諸島をニューギニアのなかからとくに区分したのは、トロブリアンド諸島の鉢とか彫刻品などを強調したかったのだろうか。土器とか臼や杵、火ばしといった調理道具、掘棒やほうきといった、ごく日常的な生活道具が目につかないのは、布教の指導者という当時の彼の立場や日程によるものかも知れない。

#### (4) ジョージ・ブラウンの収集

筆者は、時間的な制約などでジョージ・ブラウン自身の日記や手記、手紙類などの直接的資料のすべてに当たっていないため、彼の民族資料の収集が宣教師としての布教の付加物であったのか、彼が単なる宣教師以上の、いわゆる自然誌に関心の深い収集家でもあったのか、という議論 (Eves 1998; Rubel and Rosman 1996) には立ち入ることができない。

また、彼の収集活動には状況的という側面があるかも知れない。例えば関根久雄によると、ブラウンのソロモン諸島での収集時期は平和化の途上期にあたり、その結果として収集された民族資料には武器類や、戦闘の文脈に関わる装身具などが多い、という<sup>7)</sup>。ニューブリテン島では人類学に関心をもちながら収集するのだけれども、白川千尋は、ブラウンは彼が望む民族資料のすべてを収集できたのではなく、例えば秘密結社ドゥクドゥクの仮面仮装などは収集できなかったのではないかと推測している<sup>8)</sup>。また前述したように、ニューギニア地域ではドブ島に親しんだにもかかわらず、クラの言及がなされていない。こうした個々のケースをみていくと、ブラウンのそれぞれ

の状況に応じる柔軟な収集活動や態度が伺えるように思われる。

とはいえ、石森秀三の、全体的に見ても多岐にわたる民族資料が収集されているという指摘<sup>9)</sup>を裏付けるように、少なくともトロブリアンド諸島とニューギニアを合わせてみた収集民族資料は、彼らの日常生活で使われていた、かなり広範囲にわたる生活用具を含んでいる、といえるだろう。

ジョージ・ブラウンが収集した民族資料の内容やその情報は充実している。しかしあるいは現在の人類学・民族学の視点からすれば、少しもの足りなさを抱かさせるかも知れない。そこには歴史状況や視点の相違、あるいは学問の深化といった面からの差異があるのだろう。とすれば、そうした差異を、つまり今から100年から140年も過去の、例えばクラが西洋に知られる以前といった時代の、現地の状態や収集者の事情といった状況を再確認するうえでも、このジョージ・ブラウン・コレクションは重要な資料と評価すべきものであろう。

#### 4. おわりに

国立民族学博物館の企画展準備のため、ジョージ・ブラウンのコレクションをひとつひとつ手にしながら、異なった視点で収集され、しかも100年以上も時間が経過した資料群が発する、ある異質感を筆者は感じていた。そしてそれは筆者自身が、単に1960年代以後の文化人類学的枠組みを基礎にして、実際の民族資料の収集についても、おおよそ第二次世界大戦以後の、全体的で包括的な民族文化理解を目指すという視点から見ていたからに過ぎないのだ、ということに改めて気づかせてくれた。

見えてくる事柄というものは状況、視点、時間などによって異なる。当然のことながら、情報の記録の大切さ、異なった視点との包括的な理解の仕方、さらには時間軸をも組み込んだそれらの動態的な理解の仕方など、ジョージ・ブラウンについてのいっそうの研究に加えて、より普遍的な問題もさらに鮮明になってきたようだ。今後の課題としておきたい。

#### 謝 辞

本稿の概略は、1998年11月28日に「トロブリアンド諸島のコレクションをめぐるの問題点」と題して国立民族学博物館の共同研究会「ジョージ・ブラウン・コレクションの研究」

(研究代表者：石森秀三)にて発表し、参加者から貴重な意見をを得ることができた。また国立民族学博物館情報管理施設の宇治谷恵氏からは、ジョージ・ブラウン・コレクションのコンピュータ処理をした統計資料を利用させていただいた。さらに、筆者の前勤務先である「野外民族博物館リトルワールド」には、収蔵民族資料に関する情報や機能別分類表などの利用を承諾していただいた。ここに記して謝意を表したい。

## 注

1) この棍棒の写真は、国立民族学博物館企画展の図録『南太平洋の文化遺産：国立民族学博物館ジョージ・ブラウン・コレクション』に掲載されている。

(石森1999:54)。またジョージ・ブラウン著『メラネシア人とポリネシア人』には木製棍棒を複数集めた写真版があり、その右端に撮影されている。しかしあまり鮮明でなく、その植物繊維の様子がはっきりしていない(Brown 1972 [1910])。なお、おもな図録や書籍(Blake, McNeish and Simmons 1979; Davidson 1980; Gathercole, Kaepler and Newton 1979; Guiart 1963; Linton and Wingert 1972; Meyer and Wipperfurth 1995; Parsons and Savage1975; Schmitz 1966など)には見当たらない。

2) 石森秀三による、国立民族学博物館の共同研究会「ジョージ・ブラウン・コレクションの研究」(研究代表者：石森秀三)での、1998年11月28日の報告。

3) 筆者は、1976年から1992年までの16年間、名古屋にある人類学博物館である野外民族博物館リトルワールドの研究員として在職していた。その時期は開館準備期から発展期にあたり、その間、民族資料の収集に従事した。その結果、業務として収集した資料はオセアニアを中心に世界各地におよぶ民族資料が3018点、写真フィルムは35ミリメートル、カラー・スライド版で16812点となっている。

4) ニューブリテン島での記述で、住民が交易で槍を売って貨幣を得ることができるとあるように(Brown 1978 [1908]:510)、ジョージ・ブラウンは貨幣が使われる場合を交易とか購入・売却と記述している。

5) 国立民族学博物館の標本管理情報には、サイズ、素材、若干の記述や機能別分類などの、割合、きちんとした情報が記載されている。しかし、それらはイギリスのボウズ博物館への売却以後にされた補足・整理情報である。おそらく1981年から1983年にわたる、ハンコック博物館での2人の人類学者Elizabeth StevensonとAntonia Patersonが実施した整

理 (Davis 1985 : 4) によるところがおおきいのだろう。しかしそれらの詳細については現時点でははっきりしていない。なお写真資料については、地名や日時、個人名などが、割合、記述されているようである (Specht 1987 : 1)。

6) ジョージ・ブラウン・コレクションについては、国立民族学博物館の機能別分類整理がおよんでいないため、イギリス側の資料情報に記載されていた、衣装・装身具、彫刻品、儀礼用具、容器、貨幣、漁具、家具、狩猟用具、光熱用具、模型、楽器、嗜好品、個人用具、原材料、記録、記念品、道具、輸送用具、台所用具、武器といった項目をもとに、またマンドッグ島のコレクションは、収蔵先の野外民族博物館リトルワールドで整理されている機能別分類の項目である、衣 (細分類に服、履物、装身具などを含む)、食 (細分類に調理加工用具、飲食用具、貯蔵用具、食物などを含む)、住 (細分類に住宅、寝具、家具、調度、暖房・照明具などを含む)、生業 (細分類に採集・狩猟・漁撈用具、農耕具、畜産具、手工業、商業などを含む)、交通・運搬 (細分類に水上交通関係具、陸上交通関係具、人の運搬具などを含む)、社会 (細分類に通信用具、教育、医療・身体加工具、武器などを含む)、人生 (細分類に出産、少年・成人、結婚、葬礼などを含む)、芸術・娯楽 (細分類に造形芸術、演技・演奏用具、遊戯・競技用具、嗜好品などを含む)、宗教・儀礼、自然先史資料 (細分類に動物、植物、鉱物、先史などを含む) といった項目をもとにして、筆者がまとめ、分類した。

組成項目は、野外民族博物館リトルワールドの分類を基にした、A : 装身具を含む衣関係、B : 食関係、C : 住関係、D : 生業・運搬関係、E : 社会・人生関係、F : 芸術・娯楽関係、G : 儀礼・宗教関係、H : その他であり、トロブリアンド諸島、ニューギニアは、ジョージ・ブラウン・コレクションの地域区分、ニューギニア全体とはこのトロブリアンド諸島とニューギニアの民族資料を合計したものである。割合は、それぞれの全体に占めるパーセントである。そのデータは以下の表の通りである (表1)。

表1 民族資料群基礎データ

	トロブリアンド 諸島		ニューギニア		ニューギニア全体		マンドッグ島	
	(数量)	(割合%)	(数量)	(割合%)	(数量)	(割合%)	(数量)	(割合%)
A 衣関係	20	7.10	340	56.29	360	40.63	192	25.00
B 食関係	78	27.66	97	16.06	175	19.75	126	16.41
C 住関係	2	0.71	0	0.00	2	0.23	24	3.13
D 生業・運搬	43	15.25	97	16.06	140	15.80	218	28.39
E 社会・人生	36	12.77	19	3.15	55	6.21	51	6.64
F 芸術・娯楽	102	36.17	48	7.95	150	16.93	58	7.55
G 儀礼・宗教	0	0.00	2	0.33	2	0.23	57	7.42
H その他	1	0.35	1	0.17	2	0.23	42	5.47
合計	282		604		886		768	

- 7) 関根久雄による、国立民族学博物館の共同研究会「ジョージ・ブラウン・コレクションの研究」(研究代表者:石森秀三)での、1998年11月28日の「ジョージ・ブラウン・コレクションの中のソロモン諸島」と題した発表。
- 8) 白川千尋による、国立民族学博物館の共同研究会「ジョージ・ブラウン・コレクションの研究」(研究代表者:石森秀三)での、1998年11月28日の発表。
- 9) 石森秀三による、国立民族学博物館の共同研究会「ジョージ・ブラウン・コレクションの研究」(研究代表者:石森秀三)での、1998年11月28日の報告。

## 文 献

Brake, Brian, James McNeish and David Simmons

1979 *Art of the Pacific*. New York: Harry N. Abrams.

Brown, George

1972 (1910) *Melanesians and Polynesians*. Reissued by New York: Benjamin Blom.

1978 (1908) George Brown, D. D.: *Pioneer-missionary and Explorer, an Autobiography*. Reprinted by New York: AMS Press.

Davidson, James

1980 *Aboriginal and Oceanic Decorative Art*. Victoria: National Gallery of Victoria.

Davis, Peter (ed.)

1985 *A Catalogue of the George Brown Ethnographical Collection in the Hancock Museum, Newcastle upon Tyne*. Newcastle upon Tyne: The Hancock Museum.

Eves, Richard

1998 Commentary: Missionary or Collector? the Case of George Brown. *Museum Anthropology* 22 (1), 49-60.

Gathercole, P., A. L. Kaepler and D. Newton

1979 *The Art of the Pacific Islands*. Washington: National Gallery of Art.

Guiart, Jean

1963 *The Arts of the South Pacific*. translated by Anthony Christie.  
Thames and Hudson.

石森秀三

1988 「福音と殺戮、そして民族学—ジョージ・ブラウンの生涯」『民博通信』40,40-60。

1999 『南太平洋の文化遺産—国立民族学博物館ジョージ・ブラウン コレクション』大阪：  
千里文化財団。

小林繁樹

1979 「リトルワールド・コレクション (15) —パプア・ニューギニア、マンドック島」  
『Little World News』17,8-13。

1992 「海に生き、人と暮らす：パプア・ニューギニア、シアシ諸島民の生活」共著『人  
間は何を食べてきたか 海と川の狩人たち』pp.161-176, 東京：日本放送出版協  
会。

1993 「メラネシアの伝統的貨幣と交換」須藤健一、秋道智弥、崎山理編『オセアニア2  
伝統に生きる』pp.95-110, 東京：東京大学出版会。

Linton, Ralph and Paul S. Wingert

1972 *Arts of the south seas*. New York: The Museum of Modern Art.

Malinowski, Bronislaw

1922 *Argonauts of the Western Pacific*. London: Routledge & Kegan  
Paul.

Meyer, Anthony and Olaf Wipperfurth

1995 *Oceanic Art*. Koln: Konemann.

Parsons, Lee A. and Jack Savage

1975 *Ritual Arts of the South Seas: the Morton D. May Collection*.  
St. Louis: The St. Louis Art Museum.

Rubel, Paula G. and Abraham Rosman

1996 George Brown, Pioneer Missionary and Collector. *Museum Anthropology*  
20 (1),60-68.

Schmitz, Carl. A.

1966 *Oceanic Art: Myth, Man, and Image in the South Seas*. New York:  
Harry N. Abrams.

Specht, Jim

1987 The George Brown Affair Again. *Anthropology Today* 3,1-3.